

宣教に向けて歩む

「一致に向けて」ということで高松教区はこの二年間歩んで参りました。そのためには司教を中心におく教区組織の充実にまず取り組みました。これはある程度実現されていて、教区としての形は出来上がっています。更に組織そのものを動かすには「上からの力」、霊的豊かさがどうしても必要であることを理解していたので、昨年は「聖体の年」と位置づけ、聖体に活かされた高松教区を目標に歩んで参りました。特に昨年の二番目の教書では「主日のミサ」の意義とその重大性を教区民の皆さんに問いかけました。しかし、これらはどちらかと言えば、教区の中の内向きの姿勢を問いかけるものでした。今年高松教区長就任三年目に

当たり、私は更なるステップとして、「外に向かつての宣教」という目標を掲げたいと願いました。内なる聖霊に満たされ、一致に向けた教会は必ず外に溢れるエネルギーを持っているものです。現在わたしたちが生活している四国四県にいかなる働きをすることができでしょうか。カトリック教会はここ四国においてどのような位置づけがあるのでしょうか。

一 制度の教会から交わりの教会へ

教会という連想では、まず塔をもった建物とそこに住む司祭や修道者、ミサの儀式が行われる場所ということがまず出て参ります。ローマとか日本司教協議会とか、ひいては司教と教区事務所などという組織的な連想をしてしまいがちです。最近言われていることは、既存の組織宗教はい

ずれも活力を失い、人の心をつかむことなく凋落の一途を辿っている。これに反して新新宗教などは、組織に頼らず、一対一の出会いと今の問題に積極的ににかかわることで発展の一路を辿っているということです。その是非はとも角、既存の伝統宗教が力を失っていることは事実のようです。その中に長い伝統があるカトリック教会も含まれています。そして、その結果をわたしたち自身が身にしみて感じているのが、現在のカトリック教会の現状ではないでしょうか。若者の教会離れ、主日礼拝の参加者の減少、受洗者数の低下、司祭、修道者の召命の減少、いずれをとっても反省の材料がたくさんあります。それではどうすれば良いのかという、いずれも暗礁に乗り上げて、なす術を失っている印象があります。その時いたずらに過去の思い出を語るか、なす術がないという悲観論に陥るか、教会内部の機構の改革に情熱を燃やして官僚化させるか、単なる評論家的な態

度で現代社会を論じるか、いずれをとっても希望的、明るい未来が開けない感があります。

第二バチカン公会議は、現代社会との対話を説き、歴代の教皇はその線に沿って種々の対話を試んでいます。政治、文化、宗教においてカトリック教会は基本的に対話を行うという姿勢を見せました。キリスト教一致の対話、諸宗教との対話はその最たるものです。一九九六年に出された「諸宗教との対話 ―対話と宣言―」では、どのように対話が行われるかを簡潔に述べています。ヨハネ・パウロ二世はこの対話を四段階に分けて説明しています。

1、生活の対話

宣教は、一緒に生活する人たちと対話ができないと何も始まりません。生活を一緒にすることで、自分が信じていることは伝わるものです。宣教は、そんなにむずかしく考

える必要がありません。どのように一緒にいる仲間とともにやっていけるかということがその始まりです。イエス様は、どうして相争っているところに神の国が実現するかと述べています（マタイ一二の二四〜二七）。まず各々が、自分が生活しているところを見直すところから出発しましょう。

2、実践の対話

わたしたちの周りには善意の人がたくさんいます。どのようにすればより良い社会をつくることができるかを考えている人たちがいます。奉仕活動をして社会の弱者を助けようとしている人たちで溢れています。自分の青春を誰かのために捧げたいと望んでいる若者に出会います。今までの経験を活かして何か社会に貢献したいと思っている団塊の世代の人たちが大量に退職します。これらの人たちと一

緒にできることは何でしょうか。彼らに自分の人生にとって価値あるものと考えられる何かを教会は提供できないでしょうか。一緒に彼らを巻き込む活動を考える時期にあると思いませんか。教会の活動に終始し、内々の人間関係だけに限られた活動をしている限り、宣教の展望は開かれません。実践の対話というのは、つまるところ相手の必要に自らが答えるという姿勢を表しています。これは押し付け型の“既存の宣教”の意識を変えていくものです。

3、神学の対話

神学というとむずかしく聞こえます。実際は自分の信念を相手に伝えていくことの必要性という言葉に置き換えることができます。今わたしたちにとって一番大切なことは、自分が納得したことば、メッセージを持つことです。これを伝えたいという気持ちをもって生きることです。本当に

これはすばらしいと思ったことは、やはり伝えることができますし、伝わっていくものなのです。しかも自分のことばで伝えることが大切になります。あまりにも西欧的な発想法とか、キリスト教的な単語で伝えすぎた欠点が私たちの教会にはあります。もっと人々に伝わる言語能力を開発しなければならぬでしょう。教会で聞くこと、学ぶことを自分のものとして表現することです。現在四国の仏教界との対話が始始されていますが、同じことばでも、異なる宗教ではどのように表現されるかという研修からそれを始めています。

神学の対話ということの中に自分の信念をはっきりさせるということと同時に、相手の信念をはっきり理解するという意味があります。宣教の大事な点の一つは相手が何を考え、何を望んでいるかを知ることです。やみくもに自分の信念を押し付けられないことです。相手が置かれている立

場から対話をしようとする試みです。ここから暖かい人間関係が生まれ、信頼が寄せられるようになります。“教えてあげる”から“相手を聴く”宣教の形に切り替えていく必要があるようです。

4、祈りの対話

最近キリスト教講座とか、青年活動とかを試みているが、いつも不思議に思うことがあります。それには、決まった信者さんだけが参加して、何か人が集まったという錯覚を持つことです。良いものだと思えば、自分がかかわっている人たちに声をかけてみたらどうなのかなという私の素朴な疑問です。人に声をかけることができないということは、多分自分にかけることばを持たないということではないでしょうか。相手の立場を考えながらも、自分が持っている信仰について考える機会を得ることができます。

自分だけで祈っていて、あるいは自分たちの内々の祈りに終始していて、周りで何かを求めている人に気づかない鈍感さがあるのかもしれませんが。一つ声がかければ多くの実りが出てきます。

宗教の基本の一つは祈りです。人に宗教を勧めることができるには、しっかりとした祈り体験が必要です。日常生活の中に祈りを入れないといけません。毎日出会う人のために祈る、毎日起こる出来事を通して祈る、毎日の生活の中に霊的読書を入れる、これらの試みが自分を聖化し、人に対しての深い思いやりにつながります。

毎日の生活こそ宣教の場なのです。その日に出会う人のために祈る、今出会う人を大切にする、これが祈りの本質であり、宣教につながる大きな力となります。

二 制度そのものを活かすように努める

カトリック教会には種々の施設や活動があります。四国には実に二十三のカトリック幼稚園と三つの学校があります。病院、老人と児童施設など社会福祉事業が七つもあります。その他の活動としてDVや薬物・アルコール依存者のケア、いのちの電話、プロライフ運動などの社会活動が挙げられます。それぞれに素晴らしい活動を展開しています。現代施設を維持するには大変な苦労があります。学校においても、社会福祉事業においても、当事者は新しい時代の対応に追われて苦労しているのはよく理解しております。また社会活動を維持するのにも大きな忍耐とエネルギーが必要なのも理解しております。ただ注意すべきことは、時代の要求に応えるということが、単なる事務的な事柄に追われてしまつて、宣教という視点を忘れてしまう危険です。事業を維持することに汲々として当初の目的である宣

教ということを忘れてしまいがちです。社会活動にしても、現代の問題の追及にだけに目がいき、その活動を通して福音を伝えるという当初の目的から外れることがあります。

私は施設や活動が不必要とか、だめだと言っているのではなく、それらをどのように福音的視点に切り替え、いかに福音を伝える場にしていけるか当事者に問いかけたいのです。ただ単に事業を持つだけでは足りません。それを通してどのようにイエスの教えが伝わるかが大切な点です。福音の喜びに満たされた職場づくり、そこにいる人々に対して伝える福音のことば、そこに働く人々の福音の証し、これらが大事なことです。組織を切り捨てるのではなく、組織をどのようにすれば活かすことができるかを問うて欲しいと思います。これはまず司教館から、そして教区事務所から始めないといけないでしょう。教区の人々の必要に応じていく教区の中核の組織でないといけません。

三 宣教の主体は信徒である

一つの教会に一人の司祭、それを補助する修道者、そして司牧を受ける信徒という図式が長くカトリック教会の中にありました。バチカン公会議は、教会における信徒の役割を強調しました。それというのも洗礼を受けた信徒は、その時から祭司職を頂いているからです。司祭というのは、地上に住む人々の願い、苦しみ、叫びを受け止め、それを神に取り次ぐ役割を有しているのです。また神からの恵み、メッセージを人々に伝える役目も有しています。実社会の真っ只中で生きる信徒こそ、この世界の人々の苦悩をよく理解するものです。それだからこそ、神に向かつての叫びを持つことができます。わたしたちが教会に毎週通うのも人々の叫びを、自分の祈りに合わせて神に捧げるためなの

です。同様に神からのメッセージを人々に伝えるためです。

私はキリシタン史を専攻しました。四百年前の教会を調べるうちに、あの時代どれ程信徒が自立していたかを見ることができました。殆どの共同体は司祭不在でした。少数の司祭たちは司祭特有の仕事、ミサとゆるしの秘跡を授けることに専念していました。共同体を守ったのは全部信徒でした。「組」という組織に守られて、物的、霊的配慮を組の頭は怠りませんでした。かれらには結婚に立会い、葬儀を行い、洗礼を授け、聖体を配るなどの特権も与えられていました。主日には集会祭儀を行い、みことばの解説を行い、祈りの指導をしていました。実にこの時代、受洗の多くはかれらの働きによるものでした。残念ながらそれがいっつの間にか司祭中心の制度化された教会の姿に変わっていききました。

これ以上今回述べることはできません。次回にはキリシタン時代を参考にして、高松教区が実践しようとしている「協力宣教司牧」について述べましょう。

二〇〇七年三月二十六日

神のお告げの祭日に

高松教区司教

フランシスコ・ザビエル
溝部 脩